

展望：repairと呼ばれる言語方略について

永山 友子

1 はじめに

人間が生活していくために用いる道具には、いろいろな性質が見られる。中には、壊れやすいものもあれば、丈夫なものもあろう。しかし、比較的丈夫なものであっても、使用される過程で、何らかの損傷を受けてしまうことがある。

例えば、自動車について考えてみよう。済ませなければならない用事ができ、外出することになったとする。行き先は、余り遠くない。順調に事が進めば、目的地に到着して用件を済ませることはさほどの困難ではないと思われた。そこで、自動車で行くことにした。ところが、移動の途中で対向車とぶつかってしまい、ハンドルが利かなくなってしまった。さて、窮地に陥ったドライバーには、どのような策が適当なのであろうか。故障した車は乗り捨て、移動の手段を失ったので用件達成は諦める。それも、一つの選択肢ではある。しかし、より建設的な方策は、故障の修理(英: repair)を試みるなどして、目的の達成に努めることであるとは考えられないだろうか。

物理的な道具と同じように、自己・他者間の意志疎通であるコミュニケーションも、さまざまな原因により壊れてしまうことがある。わからなくなってしまった話は、故障した自動車と同じように、放棄することも可能である。けれども、話を続けようとするのなら、意志の疎通を立て直すことが望ましい。では、人と人との間のコミュニケーションは、どのような言語行動を通して立て直されるのであろうか。

本稿は、コミュニケーションの破綻を修復するためのrepairと呼ばれる言語方略に着目する。そして、先行研究を整理して理論的な位置付けを試み、今後の研究を方向付けることを目的とする。

2 repair とは何か

2.1 repair と訂正

”repair”という語は、「修理する、修復する」という意味を持つ。壊れたものを直すのがrepairであるのなら、壊れてしまったコミュニケーションcommunication breakdownを立て

て直すための方略こそが repair であるとの類推が成り立つ。

「壊れること」と「誤ること」が同義であると言い切ることはできない。運転手の操作ミスが起因となって自動車が壊れてしまうことは、確かにありうる。しかし、これといったミスが見られなくとも、不測の事態が生じ、修理を要する事態に陥ることもある。逆に、たとえ運転ミスが認められても、車は壊れることなく、目的地に辿り着けるかもしれない。

では、この類推を、コミュニケーションに当てはめてみよう。周りの音が大きかったり、発話者の声が小さかったりして、発話が聞き取れないとき、自分と相手とのやり取りはうまく行かなくなる。しかし、その場合、やり取りが不満足に終わった原因は、自分や相手の起こしたエラーであるとは言えない。一方、発話産出の過程で、自らの意図を適当に表現しうる言語形式を発話者が独力で探す「ことば探し」word search(例: "I bought a uhm...what do you call it...a floor polisher." *Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics* からの引用)なども、つまづいてしまった発話を何とか継続しようとする試みと言えよう。自らの意図するところを適切に表現できることばがうまく思い付かないとき、意志の伝達を成功させようと、発話者は適当な表現を探す。それもまた、言いたいことを「誤解のないように」相手に伝えるための方策である。しかし、「うまく思い付かない」ことは、「誤り」ではない。発話の誤りを正す「訂正」も、もちろん的確なコミュニケーションへの道を拓く一つの重要な策となる。けれども、意志の疎通が破綻してしまう原因は、必ずしも発話の誤りではないと思われる。誤りを正す「訂正」と、破綻を修復する repair とを同義語として扱うのは、やはり不適當¹ではあるまいか。

ところで、言語方略としての repair は、「修正」と訳されている(『ロングマン応用言語学用語辞典』)。しかし、この訳語のやや訂正的な響きは、"repair"の実態に必ずしもそぐわない。そのため、本稿では、"repair"の文字通りの意味を尊重するため、「修正」という訳語ではなく、"repair"という原語を使用する。そして、repair をコミュニケーションの破綻を修復するための方略と定義する。

2.2 破綻の診断

前節では、repair の範疇に入るのは「訂正」だけではないということを述べた。そして、その対象は、エラーというよりは破綻として捉えた方が妥当であることも示した。それでは、repair が対象とする破綻とは、どのような現象なのであろうか。

¹伊藤(1991)は、「間違った発話を訂正する "correction" も当然含むものであるが、相手とのコミュニケーションを円滑に行い、誤解のないように意志の疎通を図るための、訂正・言い換え・言い直し・補足といった広範の発話行為」が repair であると述べている。

まず初めに、自分と相手のどちらが理解不足を起こしているのかを問わねばなるまい。自分が相手の発話を理解できないとき、自分は相手に repair を要求する立場に立つ。逆に、相手が自分の発話を理解してくれないときには、自分が相手に repair を行う（もしくは、要求される）ことになる。

自分が相手の言っていることを理解できないケースは、聞き取りができない場合と、意味が理解できない場合とに区別できる (Gass and Varonis, 1985)。発話の聞き取りは重要であり、失敗した場合には、コミュニケーションの成立基盤そのものが崩れてしまう。けれども、発話を聞き取ればよいというでもない。聞き取れたとしても、その発話の形式的な意味が理解できない場合、更に、意味は理解できても発話の意図が把握できないときにも、やはり意志の疎通は困難に陥る。相手が自分の言っていることを理解してくれないケースも同様に、聞き取ってもらえない場合と、意味や発話意図を把握してもらえない場合とに分かれてくる。

いくつかの研究には、破綻の診断基準が示されている。Tomasello et al. (1990) は、子どもと両親とのコミュニケーションを扱う中で、次のような基準を立てている。

”Breakdowns. A turn or episode containing a parent reply to a child utterance that was either a Request for clarification, a Breakdown Non-Acknowledgement, or a Breakdown topic shift.”

request for clarification (明確化要求) の背景には、相手の発話に関してはつきりしなかった点を聞き返すという、聞き手の覚えた理解不足が認められる。一方、non-acknowledgement (聞き流し) とは、自分の発話が相手に聞き流されるという、話し手の側から見た破綻である。好ましくない事態を打開するためには、話し手が repair への働きかけを行う必要が出てくる。そして、topic shift (話題変更) は、行き詰まった話題を打ち切るなどして、他の話題へと移るケースになる。これも、自分の言っていることが相手にうまく伝わらないことが原因であり、話し手の側の破綻認識であろう。

repair の分類を通して、その対象である破綻の種類が窺える。Tarone (1980) は、「意味の repair」(repair of meaning) と「形式の repair」(repair of form) とを区別する。前者が観察されるのは、自己・他者間に理解不足が起こる場合である。けれども、相互理解は成立するものの、その際の表現形式が文法的に正しくなかったり、社会言語的に不相当と判断されるときには、形式の repair が行われるという。しかし、形式の不相当さが理解不足を招くような場合、この2つの repair は融合しよう。

もう一つの破綻の診断基準として、「一方の期待するような反応が他方から提出されるか否か」も考えられよう。これは、特に教室談話 classroom discourse などの教育的な文脈

において観察される現象なのであるが、教える側が教わる側の言っていることを理解できたとしても、後者の反応が前者の期待に沿わないようなときには、破綻が発生したと見なされて、repairに至るようである (Kasper, 1985; McHoul, 1990)。

また、Kasper(1985)が会話において顕在化した破綻への対処のみを検討している一方で、まだ起こってはいないが、予期される破綻を未然に防ぐための方略も範疇に含める研究もある。Schwartz(1977)は、repairを”a strategy for achieving understanding when there is some kind of breakdown or trouble, or some is anticipated”として扱う。破綻を未然に防ぐというのは、まだ壊れてはいないが壊れそうな状態にあるものに、手を入れて補強することに喩えられよう。更に、破綻の度合いは下がるものの、「自分の言っていることを、相手がきちんと理解してくれたかどうかははっきりしない」「自分が、相手の言っていることをきちんと理解したかどうかがよくわからない」というときになされる、自分の理解の確認、並びに相手の理解の確認も、破綻への対処として認定されることがある (Tomasello et al., 1990)。

3 発話交換としてのrepair

さて、repairについての研究は、発話交換としてのパターン抽出と情報伝達を助ける効果を問うという2つの流れに集約できる。発話交換としてのrepairは、ある発話が原因となつてコミュニケーションの破綻が発生するとき、その破綻を認識し、修復を行うのが当の発話者であるのか、それとも他者であるのかを基準にして分類される。情報交換を助ける方略としてのrepairは、外国語学習者によるコミュニケーション・ストラテジー (Bialystok, 1990) (以下、CommS) や、成人母語話者が非母語話者や子どもに向けて行う会話の調整 conversational adjustment (Long, 1983) の一種として分析される傾向にある。

repairの発話交換を分析する際には、「自己」(＝破綻の起因となつた発話の話者)と「他者」の視点とが必要になろう。自分が相手を理解できないときと、相手が自分を理解してくれないときとは、発話者の言語行動が異なってくると思われる。3人以上の参加者がいるやり取りでは、「第三者」というカテゴリーも重要になる。自分が相手の言っていることを理解できないときに、相手ではない第三者に問いかけたり、相手が自分の言っていることを理解してくれないときに、第三者に会話を立て直すための助けが求められることもありうるからである。このようなrepairの委任 (repair delegation) という現象も、破綻修復のための重要な手段であるとされる (Kasper, 1985)。

Schegloff et al.(1977)には、会話におけるrepairパターンの詳細な分析がある (表1)。それによれば、repairの発話交換 repair trajectory は、トラブルの起因 trouble source →

トラブルの認識・指摘 initiation → トラブルの修復 completion という3つの段階からなる。複数の段階が同一人物によってなされるときは、段階が融合して区別が付けられないこともある。しかし、これらの段階が常に同じ話者によって行われるとは限らず、段階の区別はやはり必要であろう。

	Turn	Content	Participant
1.	Single turn	Trouble source+initiation+completion	Self
2.	First turn	Trouble source+initiation	Self
	Next turn	Completion	Other ²
3.	First turn	Trouble source	Self
	Next turn	Initiation/completion	Other
4.	First turn	Trouble source	Self
	Next turn	Initiation	Other
	Third turn	Completion	Self
4'	First turn	Trouble source	Self
	Next turn	()	Other
	Third turn	Initiation/completion	Self

表1 repairのパターン(Kasper(1985)、McHoul(1990)、Schegloff(1992)を参考にした)

ある発話において何らかのトラブル trouble source が認識されたと想定する。言わんとすることばを見つけれなかったり、言いかけたことばが自分の意図を表現するのに不適當であると感じた発話者が、トラブルを認識したとしよう。そのようなとき、当の発話者が言い換えや「ことば探し」によって、自分自身でトラブルを処理できたなら、repairは自己完結する(パターン1)。例を挙げると、例(1)では、「rip off」という自分の表現の意図は文字通りの「はぎ取る」ではなく、「盗む」であることをきちんと伝えるため、発話者である Marcia 自身が言い換えをしている。

(1) Marcia : ...Because the top was ripped off his car which is to say somebody helped themselves. (Schegloff, 1992)

しかし、発話者自身が自分の発話のはらむトラブルを解決することができないとき、また、発話者が気付かずにいたトラブルが他者によって認識・指摘されるとき、repairは、自己と他者とのやり取りにまたがる言語行動となる(パターン2,3,4)。パターン2は、発話のつまずきを話者が自分で解決することができずに、相手に助けを求め、その相手に修復を任せる場合である。パターン3では、自分の発話の抱えたトラブルが相手によって指摘された上、修復もなされる。パターン4では、自分の発話に対し、他者からの聞き返

²ここで言う "Other" (他者) には、「やり取りの相手」と「第三者」との両方を含めたい。

しを受けるのであるが、他者はトラブルの指摘にとどまり、修復作業自体は、元の発話者自身に任せられるという状況である。initiationの部分を修復主導・先導、completionを修復実行として捉えるならば、パターン1は自己主導・自己実行型、パターン2は自己主導・他者実行型、パターン3は他者先導・他者実行型、そして、パターン4は他者先導・自己実行型と言えよう。ところで、Schegloff(1992)が特にthird position repair (第3ターンでなされる修復)と名付けているパターン4'は、自分の発話が相手によって勘違いされてしまう場合を指す(例2)。

(2) Dan: Well that's a little different from last week. (トラブル発生)

Louise: heh heh heh Yeah. We were in hysterics last week. (勘違い)

Dan: No I mean Al. (修復)

Louise: Oh, He... (Schegloff, 1992)

自己と他者とのやり取りの中で認識されたトラブルは、このようにして修復に至る。そして、修復の結果をもってrepairの発話交換は締め括られる(Schegloff et al., 1977)。けれども、意志疎通の修復が常に成功するわけではない。失敗に終わったときには、その失敗が更なる修復の対象となり、修復を目指す発話交換が、もう一巡することもある。

更に、会話におけるrepairのなされ方には、パターンの優先・非優先が指摘されている。コミュニケーションの破綻の修復がrepairの根本的な目的ではあるが、破綻の修復も一つの言語行動である以上、情報交換を超えた要素が関わってくるものと思われる。自分の発話がトラブルを引き起こすかもしれないとすれば、他者に影響が及ぶ前に、自分でその解決を図る方が望ましい。そうすれば、トラブルが拡大しなくて済むし、会話の流れを逸らさずに事態の收拾を図ることができるからである。Schegloff et al.(1977)は、自己主導型の方が他者先導型よりも、自己実行型の方が他者実行型よりも好まれると主張する。

けれども、発話者による自己完結が常になされるとは限らない。発話者が自らの発話に伴うトラブルに気付いても、自分で処理することのできない場合(パターン2)もある。発話者の気付かなかったトラブルが他者によって、指摘されること(パターン3,4)もありうる。トラブルを指摘した他者が、指摘するだけでなく、修復も行う場合(パターン3)と、修復そのものは発話者に任せられる場合(パターン4)のいずれにも、ターンは発話者から他者に渡ってしまう。しかし、そのときにも、トラブルの修復は発話者が自分で行うというパターンの方が優先される。他者は、トラブル修復をするというよりも、トラブルの修復をするように相手(=トラブルの起因となった発話の話者)に働きかける傾向が強い。働きかけるときの言語表現も、直接的ではない間接的な表現形式が用いられることが多い。そして、それでも自己による修復がなされなかったとき、他者による修復が

なされることになる。コミュニケーションの修復という目的に支障を来さない限りにおいて、他者の発話への介入を控えるというパターンの優先・非優先が、repairの発話交換には見受けられる。

4 情報交換を助ける手段としての repair

repair研究のもう一つの流れとして、「ことばの簡略化」という分析の枠組みがある。未だにことばの獲得過程にある相手と向き合ったとき、その理解を促すために、成人母語話者は自らの発話を調整 adjust していく。Long(1983)によれば、発話の調整は、言語形式の調整 linguistic modification と会話上の調整とに分類される。言語形式の調整には、使用語彙の限定、短い文や単文の多用などが数えられる。会話の調整は、自分と相手とのやり取りの過程で、くり返しや言い換えをしたり、内容ではなく正否を問う質問を多くするなどして、相手との相互作用 interaction を促すものである。相互作用を立て直すために会話を調整していくことは、破綻を修復する repair の一つの形であるとも言える。

おとなと子どもとの相互作用における repair は、言語発達の過程においても、重要な位置を占める (Tomasello et al., 1990)。そして、会話の参加者が教える側と教わる側となり、それぞれの社会的役割を踏まえて向き合う教室のような教育的な文脈においても、独特な様相が指摘されている (Kasper, 1985; McHoul, 1990)。

4.1 母語話者と非母語話者

母語話者 (以下、NS) と非母語話者 (以下、NNS) とのやり取りでは、NS と NNS のそれぞれに、理解不足を起こす可能性が認められる。NNS が発話の際に言いたいことばが見つけれられないときの「ことば探し」や、NS に対する理解不足を覚えたときの聞き返し等は、CommS としての repair でもある。適当なことばが見つからず、相手の NS に助けを求めるというのも、repair に該当する。日本語学習者の中間言語研究では、尾崎 (1993) が、学習者による母語話者への「聞き返し」を取り上げた。聞き返しは、對他者の修復要求として位置付けることもでき、repair 方略の一環 (他者による repair 先導) をなす。学習者が自分の理解不足を修復するためには、相手の発話に求める点を明確にした聞き返し (例3) がより効果的であるというのが、尾崎 (1993) の結論であった。

- (3) NS : 面接などでは、緊張—するほうですか↑
 FS (=NNS) : 緊張は何ですか↑ (聞き返し : 修復要求)
 NS : ドキドキしますか↑
 FS : … うーん (尾崎, 1993)

そして例(4)は、NNSからの聞き返しに応じたNSが、先立つ自分の発話の詳細化 elaboration を図っている例である。

(4) NNS: How have increasing food costs changed your eating habits?

NS: You know, you like you stock up when things go on sale so that when the prices go up you don't have to uh, buy them.

NNS: Pardon me? (聞き返し: 修復要求)

NS: You stock up on the uh, sale items occur so that when they go off sale, you already have a bunch of it so that you don't have to go out and buy it at a higher price. (修復作業: 詳細化) (Gass & Varonis, 1985)

他方、Pica(1988)は、NSがNNSの発話を理解できないというケースを論じる。NNSもNSからの聞き返し(明確化要求)に応じて、自らの発話を調整できるということが分析の結果で明らかにされた。けれども、NSが理解不足を訴えるほとんどの場合、NNSによる調整が行われるよりも、明確化要求を出したNSの方が先回りする形で、理解可能な発話として期待される表現形式を提示し、NNSの発話にモデルを与えていることもわかった(例5)。意志疎通の修復は、NSの働きかけに負う部分が大きいことになる。

(5) NNS: I read psych-psychology infant infantile very children

NS: child psychology? you studied child psychology? (明確化要求+モデル提示)

NNS: yes (了解)

NS: I see (Pica, 1988)

4.2 おとなと子ども

この節では、おとなと子どもとの間のやり取りに見られる repair について触れてみたい。Tomasello et al.(1990)では、おとなが子どもの発話を理解できない、子どもの発話に耳を傾けないといったコミュニケーションの破綻が取り上げられ、おとなからの明確化要求と、聞き流されてしまった子どもの対応が repair として議論されている。明確化要求は、おとなが子どもの言っていることを十分理解できないときのおとなからの働きかけである。このカテゴリーは、聞き返す点を特定した問いかけ、特定されていない漠然とした問いかけ、そして、おとなによる理解確認の3つに分けられているが、いずれにしろ、おとなからの働きかけによって破綻の修復に至る。トラブルを引き起こすのは子どもの発話なのであるが、repair に当たって子どもは受動的な立場に廻る(例6)。

(6) Child : Hide it

Mother : What? (漠然とした問いかけ)

Child : Hide behind my...

Mother : You gonna hide it behind your back? (特定化された問いかけ)

Child : Yeah- (Tomasello et al., 1990)

けれども、子どもの言っていることをおとなが聞き流してしまうという状況では、聞き流されてしまった発話におとなの注意を向けさせるためには、子どもの方から働きかける他はない。子どもが修復の先導役を務める必要が生じるのである (例7)。

(7) Child : Do it

Mother : (no response) (聞き流し)

Child : Do it with the boat (くり返し+新情報)

Mother : you do it (Tomasello et al., 1990)

コミュニケーション上の負担という見方をするならば、子どもに求められる部分は、(6)よりも(7)の方で多くなる。確かに、おとなからの働きかけがあり、子どもの負担が少ない場合の方が、修復の成功率は高い。子どもから働きかけなければならぬ場合には成功率が下がり、しかも、父親よりも、子どもと過ごす時間の多い母親相手の方が、成功率は上がる。子どもからの働きかけも、父親相手 (例8) よりも、母親相手 (例6,7) の方が積極的であることが見て取れる。おとなが子どもの言っていることを十分に理解できないといった場合、子どもはおとなに寄り掛かる形で、自分の発話が引き起こしたトラブルの修復に当たっていたといえる。しかも、自分をよりよく知っていてくれるおとなに寄り掛かろうとする傾向が強い。

(8) Child : Phone

Father : What?

Child : Phone (くり返し) (Tomasello et al., 1990)

4.3 教える側と教わる側

さて、子どもが学校に入ると、子どもを取り巻く言語環境は大きく変わる。わからないことがあっても、母親のように自分をよく知ってくれているおとなからの働きかけは期待できない状況に身を置くことになる。教室は、一つの社会空間である。教える側と教わる側とが、それぞれの役割を踏まえて、互いの共通理解を目指す相互作用こそが、その本

質であると思われる (茂呂, 1991)。では、教室という状況でなされる repair は、どのような特徴を見せるのだろうか。

Schegloff et al.(1977) の枠組みによる教室談話 (高校の地理) の分析は、McHoul(1990) にある。教室談話においても、教師の発話と生徒の発話の両方がトラブルの起因となる可能性があり、どちらの側にも修復の先導・実行は可能である。しかし、表1に示した4つのパターンの分布が調べられたところ、生徒の発話の修復が教師によって先導されるというパターン4の割合が高いことがわかった。この結果を踏まえ、McHoul(1990) は、教師による修復先導に注目する。特に顕著に現れたのは、教師が行う「手がかりの提示」clueing という現象であった。生徒 (= P) の発言にトラブルが見受けられたとき、教師 (= T) は自分の期待する応答につながるようなヒントを生徒に示す (例9)。ヒントを与えることは、それに先立つ発言を妥当なものとして是認しないことでもあり、間接的な対他者の修復要求として機能しうる。例9では、発言を他の生徒に振り替えていることから、それに先立つ P の発言の不適當さが暗示されている。

(9) T : How might the CBD increase in size

T : Er m Peter

P : Er m it c'n erm take away

P : Erm residential areas surrounding it an' building more buildings more CBD

()

P : round the residential ones

T : The thing to remember of course is the CBD is hemmed in by residential and industrial areas (手がかり提示)

begincenter (略) endcenter T : Chris (他の生徒を指名) (McHoul, 1990)

例9には、教師と一人の生徒の間に起きたトラブルを修復するプロセスに、第三者であった他の生徒たちが巻き込まれていく修復委任 (Kasper, 1985) の過程も観察できる。局所的なトラブルの修復が、教室談話全体の展開につながられているのである。

どのような活動がなされているかという局面による違いも、外国語の授業 (デンマークの高校での英語) での談話を分析した Kasper(1985) によって指摘されている。言語学習に重点が置かれているタスクでは、"pedagogical repair" (教示的な repair) の頻度が上がる。教示的な repair は、形式の repair でもあり、生徒の発話の誤りが教師によって指摘される。誤りの訂正は、教師に指名された他の生徒に引き継がれることもあるが、例10では、当該生徒によってなされる。教師による是認をもって、repair の発話交換は終了する。

- (10) L (=学習者) : er then Peter were made n angry with James
 T (=教師) : good -er Peter- (修復要求)
 L : was (修復)
 T : yes (是認) (Kasper, 1985)

他方、内容の理解が中心とされるタスクでは、教師も生徒も自己完結型の repair をよく行う。しかし、両者による他者先導・他者実行型も多く見られており、この局面での repair は、教室談話と通常の会話との間の中間的な特徴を見せていると言える。

5 終わりに

repairの根本的な目的はコミュニケーションの破綻の修復にあるのだが、成人母語話者同士の会話では、破綻の起因となった発話の話者自身による修復を促す方向で、自己と他者とのやり取りが進行する。けれども、自己と他者との間でコミュニケーション能力や話題に関する知識の釣り合いが取れていない状況 (NSとNNS、おとなと子ども、教える側と教わる側) では、劣っている側の起こしてしまうトラブルを、優っている側が修復する機会が増える。コミュニケーション能力が十分でない相手に対しては、他者発話への介入を抑制するよりも、疑問点をはっきりさせ、相互理解を確実にすることの方が先決となると思われる。その結果、非母語話者や子どもが相手となるときには、相手の発話への介入が増えてくと推測される。円滑なコミュニケーションが成立するためには、コミュニケーション能力の優る側に依存する部分が高くなるとも言えるであろう。

外国語学習者や子どもの発話への明確化要求には、ことばの獲得への効果も窺われる。彼らの限られた言語資源 language resources が原因となって、意志疎通の破綻が起きてしまうとき、repairを行うことは、学習者や子どもがそれまで知らなかった知識を獲得していく過程でもある。自分の知らなかった事柄について表現するため、自分自身の言語資源を十二分に活用するための方略でもある。

ことばの教育の場においても、repairは教授法に関連した課題となる。教える側にとっては、自分の意図するところを教わる側に効果的に伝えるための方略になる。学習者の発話で不適当と思われる部分に対する repair が、ことばの獲得にどれほどの影響を与えることができるのか。一時的な破綻の修復が、果たして新しい知識の定着につながっていくのであろうか。repairの教育的な効果を疑問視する研究の数は少なくない。けれども、repairの効果が一時的な現象にとどまらない可能性は十分にある。即時的な効果は見られなくても、時間の経過を待って効果が表れてくるという可能性も否定することができない。Gass and Varonis (1989) が "lapsed repair" (時間差を伴った repair) と呼ぶ例11で

は、Chinatsuによる "dog" という語の誤った発音が、相手である Yoko の意味の理解を妨げてしまう。誤った発音のままでも、Yoko は何とか理解し、問題の語に期待される発音を示す。けれども、Chinatsu の発音が正しくなるのは、それから8つものターンを経た後になる。

(11) Chinatsu : ...woman has a [dɔk] (トラブルの起因：発音のエラー)

Yoko : duck?(surprised)

Chinatsu : [dɔk] (トラブルの起因：再度のエラー)

Yoko : [dɔk]ah, I see- (了解)

Chinatsu : a [dɔk] (トラブルの起因：発音のエラー)

Yoko : What kind of dog? (期待される発音)

(eight turns)

Chinatsu: The dog wear s-some clothe... (正しい発音) (Gass & Varonis, 1989)

repair の検討に際しては、いつ、どちらの側が repair を先導・実行するのかわけだけでなく、そのために用いられる言語表現を考慮する必要もあろう。他者による先導である「聞き返し」を取ってみても、漠然とした聞き返し(例：「えっ」「はっ」)から、相手の発話をくり返しての理解確認までと範囲は広い。それらの表現形式がもたらす修復効果の相違も予想できる。教える側にとって、学習者の不適当な発話を効果的に修復し、学習効果を定着させるため、repair は重要な課題となるのである。学習者にとっても、破綻を予防し、修復する方略である repair の意義は大きいと思われる。

意志疎通の維持という観点から考えると、破綻が起こってしまったから修復するよりは、それを未然に防ぐ方が好ましい。けれども、自己と他者との間にコミュニケーション能力の不釣り合いがあるとき、破綻の起きる確率は高くならざるをえない。ことばの獲得過程にある学習者は、コミュニケーション能力が十分でなく、他者との意志疎通の過程で破綻に直面する可能性が高くなる。しかし、コミュニケーションの破綻は、母語話者にも非母語話者にも、おとなにも子どもにも起こりうる現象である。話がわからなくなる理由として、発話者や会話の相手が子どもや外国語学習者であることを挙げるのは、適切であるとは思われない。母語話者であるか否か、おとなであるのか子どもであるのかによって生じる相違は、それぞれが直面するであろうトラブルの性質であり、repair としてどのような言語行動が取られるかであろう。

ところで、repairの研究は、成人母語話者については発話交換としてのパターンの優先・非優先を指摘し、子どもや外国語学習者に関しては情報交換を助ける手段として、ことばの獲得（教育）への効果を問うという2つの流れに分かれているようである。先行研究のこの2つの流れを統合することが、これからの課題になろう。パターン抽出、優先・非優先の認識と、破綻修復への効果を検討し、repairの言語行動の全体像を把握することこそが、求められるのではないだろうか。会話のデータを用いた実証的な研究を期待したい。

2ここで言う“Other”（他者）には、「やり取りの相手」と「第三者」との両方を含めたい。

参考文献

- 伊藤博子 (1991) 「対談番組における repair」 『日本語学』 10-6 pp.62-74
- 尾崎明人 (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー — 「聞き返し」の発話交換をめぐる一」 『日本語教育』 81 pp.19-30
- 茂呂雄二 (1991) 「教室談話の構造」 『日本語学』 10-10 pp.63-72
- 山崎真稔、高橋貞雄、佐藤久美子、日野信行訳 (1988) 『ロングマン応用言語学用語辞典』 南雲堂
- Bialystok, E. (1990) *Communication Strategies: A Psychological Analysis of Second Language Use* Oxford: Blackwell
- Gass, S. M. and E. M. Varonis (1985) "Variation in native speaker speech modification to non-native speakers" *Studies in Second Language Acquisition* 7 pp.37-58
- (1989) "Incorporated repair in nonnative discourse" In M. Eisenstein (ed.) *The Dynamic Interlanguage: Empirical Studies in Second Language Variation* New York: Plenum
- Kasper, G. (1985) "Repair in foreign language teaching" *Studies in Second Language Acquisition* 7 pp.200-215
- Long, M. H. (1983) "Linguistic and conversational adjustments to non-native speakers" *Studies in Second Language Acquisition* 5-2 pp.177-193
- McHoul, A. W. (1990) "The organization of repair in classroom talk" *Language in Society* 19 pp.349-377
- Pica, T. (1988) "Interlanguage adjustments as an outcome of NS-NNS negotiated interaction" *Language Learning* 38-1 pp.45-73
- Richards, J. C., John Platt and Heidi Platt (eds.) (1992) *Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics* 2nd edition Harlow: Longman

- Schegloff, E. A. (1992) "Repair after next turn: the last structurally provided defense of intersubjectivity in conversation" *American Journal of Sociology* 97-5 pp.1295-1345
- Schegloff, E. A., G. Jefferson and H. Sacks (1977) "The preference for self-correction in the organization of repair in conversation" *Language* 53-2 pp.361-382
- Schwartz, J. (1977) "The negotiation for meaning: repair conversations between second language learners of English" In D. Larsen-Freeman (ed.) *Discourse Analysis in Second Language Research* Rowley, MA: Newbury House
- Tarone, E. (1980) "Communication strategies, foreigner talk, and repair in interlanguage" *Language Learning* 30-2 pp.417-431
- Tomasello, M., G. Conti-Ramsden and B. Ewert (1990) "Young children's conversations with their mothers and fathers: differences in breakdown and repair" *Journal of Child Language* 17 pp.115-130

some accounts of conversational repair

Tomoko Nagayama

Conversational repair can be defined as a strategy to deal with probable communication breakdown. Since possible trouble sources in communication are not particularly confined to grammatical/sociolinguistic errors, it will be inappropriate to treat automatically "repair" and "correction" as the same. Analytically the breakdown and its repair should be described from two angles: the speaker of the trouble source utterance and its respondent. Troubles in the course of communication are diagnosed largely in terms of hearing of utterances and understanding of their meaning. Linguistic forms might be recognized as another trouble source, if certain expression is apparently ungrammatical or sociolinguistically unsuitable. Educational concerns can also result in pedagogical repairs, i.e. teachers attempt to somehow elicit "expected", not understandable, responses from their pupils/students.

To summarize, research into conversational repair can be sorted out into the discourse analytic current for one and the psycholinguistic one for another. The former aims to explicate patterns of repair sequences, whereas the latter examines their effectiveness regarding information exchange. Thus future studies will be expected to conflate these two trends. Effects of conversational repair on (second-)language development and its education is also worth careful examination of researchers.